あなたの胸で眠りたい

——長安遊侠傳

藤 水名子
Fuji Minako

あなたの胸で眠りたい

――長安遊侠傳――

藤 水名子

あなたの胸で眠りたい——長安遊侠傳——
第1刷発行——1994年7月25日

著者——藤水名子
発行者——若菜正
発行所——株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋2-5-10 〒101-50
電話 03-3230-6100(編集部)/3230-6393(販売部)/3230-6080(制作部)
印刷所——中央精版印刷株式会社/錦印刷株式会社
著者との諒解により検印は廃止いたします。
©1994 Minako Fuji, Printed in Japan
ISBN4-08-775035-3 C0093
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

書き下ろし長編小説

あなたの胸で眠りたい――長安遊侠傳――

目次

序曲　杜陵（とりょう）の夢　5
2　平康坊宵の刻　15
3　兄妹　36
4　一城、狂える季節（ころ）　49
5　過ぎし日のリフレクション　74
6　忘憂草―わすれぐさ―　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7 寶進（とうしん）・無情の曲 130
8 こぬか雨 160
9 夏の萌し（きざし） 194
10 二つの秘事 221
11 乱菊 242
12 水に映る月 272
13 最後の元宵 302
14 別れ霜 331
終曲 子夜呉歌 363

イラストレイション　吉野朔実
ブックデザイン　太田和彦

序曲　杜陵の夢

「せめて、お名前を」
男が必死にかき口説く。
その強引な腕が、牡丹の花よりもまだ白い、女の細腕を掴みかけている。
梔と楡とが半々くらいに植生する背の低い楚の茂みで、厭味なくらい上等の衣を身につけた若い男が、女の赤い袖口を捕らえて離すまいとし、
「どうか、そればかりは……」
女は軽く抗っていた。
消え入りそうな声音で首を振り、美しい顔を、なんとか男の目から隠そうとする。
薄青い被衣の下に覗く両の目は時に応じて潤いを帯び、漆黒に翳って、いまにも泣きだしそうだった。わななく紅唇は濡れたような艶を湛え、男の欲望を激しくかき乱さんとするかにも見えるのに、この一途な――或いは闇雲とも思える恥じらいの仕方はどうだろう。
（生娘故の、恥じらいだ）
それがまた、男の気持ちを一層わりないものへと追いやってしまうのを、おそらく彼女はゆめ知るま

い。
「お許しくださいませ」
片袖で半顔を抑えつつ、あまりにか細い、悲鳴のような声を、女はあげた。
「もう、帰らねば……家の者に、咎められてしまいます」
「では、今度は？この次は、いつお会いできます？」
若さと自恃心とがこれでもかとばかり露呈した、鼻持ちならない口調の強さで、男は女に問い返す。女は首を振っている。一刻も早く戻りの車に乗り込まねば、と気を逸らせ、それ故最前から、盛んに逃げ腰の姿勢を見せるのは、どうやら自分を嫌ってのことではなさそうだ、と男は確信した。彼は自分の、名家の令息とも思えぬほど下卑てやさぐれた容貌に、絶対の自信を持っていたのである。
女は、多分厳しく躾られた良家の娘なのだろう。麗らかな陽気に誘われ、こっそり家を抜け出してはみたが、無断の外出がばれて父母の叱責を受けるのは怖い。それを思うと気が気でなく、いまから体が震えだす。男の言葉すら、ろくに胸にもとどまらないのに違いない。
（なんと可愛いひとだろう）
男は内心、彼女の怯えた様子を嬉しんでいる。震える肩に手をかけて遮二無二抱き寄せ、耳元に、いつも自分が、酒楼の娼妓や屋敷の侍女たち相手に口走っているような下品で卑猥な言葉の数々を囁いたなら、一体彼女はどんな顔をするか。……想像するだに、愉しくてならない。
「では、どうか……こういたしましょう」
つと、女が口調を落ち着かせて言った。
「お手を」
と柔らかく、男の腕を振りほどいておいて、袖口に隠された己が二の腕から、やおら赤い色の腕輪をはずす。はずしたものを、そっと男の手に握らせ、

「これを私だと思って、次に会う時まで、肌身離さずお持ちくださりませ」
はじめてまっすぐに男を見た。
被衣からこぼれて白い額を覆う黒髪の豊かさ、艶やかさ。黒い瞳の中にうっすら滲む媚と含羞。男のすべてを狂わさずにおかない至上の媚態が、そこにはあった。
（これほどの美女、平康の三千華麗の中にだっていやしないぞ）
男は手も無く魅せられてしまった。
彼は、都でも有数の大貴族家の息子――それも、札つきと呼ばれる不良公子であった。日々是遊興に耽り、妓楼の女を相手に乱行を重ねる彼が、この時ばかりは生まれながらの貴公子そのまま、実に行儀のよいふるまいを見せた。
「わかりました。では、私からも、これを」
と、自分が左手に嵌めていた瀟洒な黄金の腕輪をはずして与え、だが、すぐにそれだけでは足りぬと思ったか、腰に帯びた白璧の佩玉までも手早く取り外すと、戸惑う女の手に持たせた。
「これを、私だと思って、肌身離さず持っていてください」
「はい」
「この次お目にかかれる時まで……」
「貴方様のことを、決して忘れはいたしませぬ」
形見の品の、交換は済んだ。
あとは別れを惜しむのみである。
「次の三の日、もし天気が良ければ、またこの杜陵へ参ります」
言い残しつつ、女は小さく後退った。
女の背後に、十五、六歳くらいと見える少年従者がいる。女主人の身を案じるような心配顔で、先ほ

どから梔の陰にて見守っていた。
女は、男の姿を惜しむように彼を向いたままで何歩か後退り、だが二度と追いつかれないだけの足の速さで少年のところまで戻ると、そこでヒラリと下裙の裾を翻した。踵を、返したのである。
「さ、お急ぎください、お嬢様」
女の手をとって促す少年の声が、男の耳にも聞こえている。
男はぼんやり、夢でもみるように虚ろな目つきで、その主従の、見る見る薄暮の彼方に去るのを見送った。
（次の、三の日）
女の残した言葉だけが、彼には唯一、生きるよすがのようにも思えてくる。
（いや……）
手の中のものを、見た。
そこに、女のくれた丹塗りの小さな腕輪がある。たったいままで、彼女がその身につけていたものだ。柔らかな肌の温みすら、未だとどまってある気がする。そうである以上、断じてあれは、夢などではなかった。
突然降って湧いたように彼の前へ現れた青い被衣の、幻の美女。……しなやかな体からは、微かに甘い杏の花の香が漂っていた。
女は、途方に暮れていた。
沓を片方なくしてしまったのだ、と泣きそうな顔で彼に告げた時の弱々しさが、男の心を容易く惹きつけた。茂みの根方へ落とした小さな赤い絹沓を探してやり、礼を述べて立ち去ろうとする女の袖を、だが彼は、すかさず捕らえて離さなかった。
「どうか、お名前を」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

男は誠心誠意懇願したのに、
「そればかりはお許しを……」
女は最後までためらった。
何かの拍子で、このことが親の耳にでも入るのを恐れたのだろう。怯えた仕草が、いとおしかった。
（これは、運命だ）
男はいよいよ確信を強めた。
次の三の日。
おそらく自分は、雨が降ろうと嵐が来ようと、この杜陵の丘の、同じ楚の中に立ち、いつまでも彼女を待ち続けるに違いないであろうと、彼は予感したのであった。

都の東南、曲江池に望む眺望の丘、楽遊原。

楽遊の古園　崒として森爽
煙綿たる碧草　萋々として長し
公子の華筵　勢最も高く、
秦川酒に対して平なること掌の如し

古くから数多の詩歌に謳われる風光の名所である。
天気のよい日には、あたり一帯、有閑貴族の子女子弟らが戯れ合い、陽気にさんざめく声でいっぱいになる。花が咲いている。水辺には鴨が遊び、雁が群れ飛ぶ。丘に登れば、北の方、曲江池の先に、都

の佇まいまでもが一望できる。高牆に囲まれた京城のうち、天衝くばかりの高い伽藍も、溢れんばかりに軒を列ねた青き甍の数々も。

なにもかもが、ここからならば、青を縈い白を繚らす絶景だ。正月朔日、三月三日の桃の節句——或いは、九月九日重陽節ともなると、御来迎を拝もうとて繰り出す人出は相当の数となる。

そんな長安名所、楽遊原の、季節は春。時は夕暮れ近い頃。

子供たちの笑い声は途切れて久しく、銀鞍白馬の遊興公子らもそろそろ家路を辿る時刻になると、丘の上に点在する雑木の林、叢、樹間のあちこちに、決まって同じ光景が見られる。

被りものに顔を隠して人目を憚る風情の女たちが、夕靄に映え立つ色の衣装を纏い、足早に往来する。求める相手に巡り逢えればよし。さもなくば、男の姿を捜しあぐね、暮れ際の郊丘を彷徨い歩く羽目となる。女たちも必死なら、男のほうもまた必死。日没までの短い時間、人目を忍んで逢瀬を楽しむ、ここは、恋人たちにとって格好の密会名所でもあったのだ。

さて、春の杜陵の夕間暮れ、車馬の往還で絶えぬ楽遊原の丘を、一散に駆け下る一組の男女があった。

「うまくいきましたね、姐さん」

「ああ、ちょろいもんさ」

下卑た言葉つきで女に笑いかけた男は、まだ十五かそこらと見える少年従者風。答えてのけた女こそは、最前男と涙ながらに別れを惜しんだ、あの、楚々たる風情の良家の美女ではないか。

「腐れ貴族のドラ息子ほど、騙しやすい人種はないね」

別人のように粗雑な口調で、女は不敵に北叟笑んだ。被りものの下の白い顔は、間違いなく、遊び馴れた貴族の御曹司を一度で虜にしたと寸分違わぬものであるというのに。

顔つき風情は既に一変。可憐なまでの朱鷺色上襦も、赤い花柄下裙も髪に挿した牡丹花の金釵も、

およそ似つかわしくない様相へと転じ、言葉つきは相当に悪さびている。
「ね、ちょっと見せてくださいよ、さっきの腕輪。……黄金でしょう？」
少年従者が、抜け目のない顔でペロリと大きく舌なめずりをする。
少年とは思えぬほどずる賢そうな表情で女を覗きこむ目には、愛すべき一片の幼さもない。
「馬鹿だね、お前は」
と女は懐からその腕輪を取り出して無造作に少年へ投げ与えつつ、
「ふん。そいつはただのまがいもんさ。鉛の上に薄く黄金を塗ってあるだけで、純金じゃないからたいした金にはならないよ」
「エェッ、これが、ただのまがいもの？そんなぁ……」
「だからあいつも、悪いと思ってすぐ璧玉まではずしてくれたんじゃないか」
忽ち泣きだしそうに情けない顔をする少年に、女は冷たく言葉を投げる。
「それより、こっちの佩玉だよ。こいつはかなりの値打ちもんだね」
「そんな小汚い璧玉がですかぁ？」
「馬鹿。なんにもわかっちゃいないんだね、蒲建、こいつは正真正銘の年代もんだよ」
「へぇーっ、そうなんですか？」
少年は、素直に嘆声をあげ、女の手の中にあるその黄白色に煤けた佩玉を見た。丸く偏平の璧面に、複雑怪奇な饕餮文を刻んだ玉が都合四つ、細い革紐で括られている。わざとぞんざいな作りに徹したこういう渋い装飾品が、どうやら昨今、長安花々公子のあいだでは流行しているらしい。
「まともな骨董屋に持ってったって、五十両はくだらない品物だね」
「本当ですか、怜娘大姐ッ！」
「お前相手に嘘ついてどうすんのさ」

「で、姐さんの渡してやった腕輪は？」
「あれは、元宵の夜肆で、タダ同然に値切って買ったガラクタさ。決まってるじゃないか」
「スゲェや、姐さん！」
「うるさいねぇ、お前は。……いちいちそう、喧しく騒ぎたてるもんじゃないよ」
少年の素っ頓狂な叫びに、本気で顔を顰めてから、
「けど、これでしばらく、遊んで暮らせるな」
女は、表情を変えても充分に美しい紅唇を皮肉に歪め、腹の底から微笑したものである。
走る二人の背中には、夕陽も既に射してはいない。薄墨を刷り落としたような空の下、丘から吹きおろす強い風に煽られて、女の衣装も少年の上衣の裾も、大きくはためき、さまざまに形を変えた。

それから数日後。
街路を挟んで朱雀門のすぐ前に位置する光禄坊の、最も皇城近いあたりへ居を構える呂家のお屋敷には、久方ぶりで出入りの骨董商の訪問があった。
次男の俊義が、何気なく父の居間の前を通りかかると、そこから大きく、複数の話し声が漏れている。
父も兄も、呂家の男たちは皆祖父の代から大の骨董好きだった。屋敷内にある三つの蔵も、すべて書画骨董の類いで埋め尽くされている。
（なんぞ、掘り出し物でも見つけたか？）
俊義もふと興味をひかれ、扉の前で足を止めていると、
「お、俊義か。ちょうどよいところへ参った。お前も、欲しいものがあれば遠慮なく申すがよいぞ」

半開きの扉の中から、父が彼の姿を認め、さも太っ腹なところを見せた。呂家の血筋の例に漏れず、俊義も無類の骨董狂である。なにがあるかと勇んで行けば、大きく広げられた骨董品の山の中、どこかで見たような佩玉がある。

（これは……）

手にとって、矯めつ眇めつしていると、

「さすがに、若様はお目が高こうございますな。それは、春秋時代の逸品にございまするぞ」

恵比須顔の骨董商が、揉み手の低姿勢で彼に告げた。

「春秋時代の？」

俊義は頻りと首を傾げた。

どこかで見たことがある。それもそのはずで、それはつい先日、楽遊原で出会った美女に、自分の形見だと言って与えたあの佩玉――それと同一の品ではなかったか？

（だが、何故それがここに？）

俊義には、その理由がわからない。

結局、見当もつかぬままに、

（よく似ているが、別物であろう）

と結論した。

騙されたのだとは、夢にも思わない。

思わない以上は、一度女に与えたものが、今頃なんで骨董商の手で我が家に持ち込まれることがあろうか。あり得るわけがない。

「よし、私はこれをいただこう」

よく似た品が再び自分の手元へめぐり来るのもなにかの縁と思い、俊義は気前よくそれを買うことに

した。どうせ払いは、父親がしてくれる。先の品の二倍近く――百両との値がつけられてはいたが、俊義は一向構わなかった。

（よし、次の三の日……あのひとと再び見(まみ)える時にも、これを帯びてゆくとしよう）

杜陵の夢から依然醒(さ)めやらぬ青年の面上。歪みきった口の端には、これが果たして上流の若様かと思えるほど卑しい、下心ありありの微笑が滲んでは消えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com